採蓮

Siren

第十一号

No.11

画譜、絵本の出版をめぐる三つの事例——菱屋孫兵衛の活動に注目して——

伊藤紫織

はじめに

菱屋(藤井)孫兵衛は江戸時代中期から明治にかけて京都で活動した書肆で、画譜、絵本を多く出版した。書誌に留意して画譜、絵本をみていくとき、刊記でしばしば目にする名前である。開版もあるものの、求版による画譜、絵本の出版が目立ち、初版初摺やそれに近いもののみに価値を置く場合には、軽視されがちな書肆である。美術的な価値という点で、また製作者の意図が反映されているという点で、浮世絵版画の場合と同様、画譜、絵本においても初版初摺が最も重要であることは疑いない。しかし、初摺本だけが画譜、絵本ではない。後摺本もおおむね同じように売買され、眺められ、使われた。後摺本にもまたそれ相応の意義がある。

現在、美術史においても、ようやく画譜、絵本が注目されるようになりつつある。しかし、その取り扱いについては依然としてさまざまな問題がある。例えば、書誌を軽視して、初摺本も後摺本も区別せず、それぞれの本の差異は気にとめず、同じタイトルであれば同一のものとして取り扱う例が見られる。逆に、既に初版初摺として認められたものだけを対象として、それ以外のものを切り捨てるような扱いも見受ける。画譜、絵本を美術史の資料として用いる場合、摺りの早い遅い、部分的な版の違いにかかわらず使える部分もあるが、使える部分がどの部分かを知るためには異なる本を比較した上での書誌の検討が必要である。また初版初摺の特徴をよく知るためにも後摺との比較が効果的である。後摺本も初摺本と同じように画譜、絵本として流通していた。後摺は後摺なりに適切に位置づけて、検討に含めたいと思う。

千葉市美術館はロバート・ラヴィッツ氏が収集した、江戸時代から近代に至る日本の絵入版本のコレクション(ラヴィッツ・コレクション)を有する。所蔵作品を展示する中で画譜、絵本に接する機会が多く、出版について興味を持つようになった。館蔵本と同タイトルの本を他の所蔵先で調査することを心がけるうちに、菱屋孫兵衛の活動に関するいくつかの興味深い事例に気づいた。ここでは『蘭斎画譜』『漢画独稽古』『欽慕画譜』の事例を紹介し、菱屋孫兵衛の活動の一端について考察してみたい。

『蘭斎画譜』

江戸時代中期に活動した南蘋派の画家、森蘭斎(一七四〇〜一八〇一)の絵を画譜として出版した『蘭斎画譜』についてその出版経緯、書誌の整理を試みたことがある(註1)。重複するが、確認できている四種類の刊記をあげよう。

① 版元が六書肆であるもの

天明弐年壬寅七月発行／書林　江府　須原茂兵衛／京師　山本平左衛門／同　吉野屋為八／同　大和屋勘兵衛／同　林伊兵衛／浪華　大野木市兵衛

② 版元が七書肆であるもの。

天明弐年壬寅七月発行／書林　江府　須原茂兵衛／京師　山本平左衛門／同　吉野屋為八／同　大和屋勘兵衛／同　林伊兵衛／浪華　梁瀬傳兵衛／同　大野木市兵衛

③ア　版元が四書肆であるもの。

天明弐年壬寅七月発行／書林　京師　藤井孫兵衛／江府　須原茂兵衛／浪華　柳原喜兵衛／同　大野木市兵衛

③イ　版元が四書肆であるもの。

天明弐年壬寅七月発行／書林　京師　藤井孫兵衛／江府　須原茂兵衛／浪華　松村九兵衛／同　浅野弥兵衛（図1）

六書肆版が最も早いものであろうことは疑いない[註2]。七書肆版は少なくとも二種あるように見えるが刊記では区別できない。早いほうを七書肆版A、遅いほうを七書肆版Bとする。四書肆版の前後関係は紙質や摺りの状態では判別しがたい[註3]。③イ四書肆版に名前の見える藤屋（浅野）弥兵衛が、『蘭斎画譜』中にも詩文を寄せる細合半斎と関係が深く、混沌社メンバーの書物の刊行にも多く関わっていることも注目しておきたい[註4]。

『享保以後大阪出版書籍目録』によると『蘭斎画譜』八冊は、画工森蘭斎、板元秋田屋市兵衛、出願安永八年九月とある。秋田屋市兵衛がすなわち大野木市兵衛である。三年後の天明二年（一七八二）に刊行された[註5]。『大坂本屋仲間記録』中の寛政二年改正「板木総目録株帳」、文化九年改正「板木総目録株帳」に「秋市」とあり、文化九年（一八一二）までは板株を秋田屋市兵衛が一軒で所有していたことがわかるので、それ以前は七書肆版でも他の六書肆は売り弘めていただけである。大野木市兵衛の名が見えなくなる③イ四書肆版は早くとも文化九年以降の出版ということになる。

『蘭斎画譜』は菱屋孫兵衛の出版した本の巻末にある出版広告「皇都書肆五車楼蔵版略書目」に載る。千葉市美術館ラヴィッツ・コレクション中、三種の蔵版書目への掲載が確認できた。文政元年（一八一八）の刊記を伴う、『漢画指南』ではじまる五丁半の広告（A　図2・3）、嘉永三年（一八五〇）以降で、嘉永六年（一八五三）以降の可能性もある、『日本書記　小寺板』ではじまる十丁の広告[註6]（B　図4・5）、同様に嘉永三年以降と思われ、嘉永六年以降の可能性もある、『日本書紀』ではじまる六丁の広告である（C　図6）[註7]。

『近世後期書林蔵版書目集』に含まれる須原屋茂兵衛の蔵版目録にも『蘭斎画譜』が載る[註8]。

出版の権利である板株は一軒で所有するだけでなく、権利を分け合う相版の場合も多い。相版の場合はそれぞれの本屋が広告に載せることはありうるので[註9]、菱屋孫兵衛、須原屋茂兵衛の出版広告に同時に載っていたとしても差し支えない。秋田屋市兵衛が所持していた板株の権利が分割されて、いずれかの時点で菱屋孫兵衛、須原屋茂兵衛も権利を持った、と考えれば理解できる。しかし次の『漢画独稽古』の事例では、板株を本屋仲間外の和歌山の本屋が持つとはいえ、恐らく菱屋孫兵衛は「売弘」の権利で出版広告に載せている。出版広告に載るからといって部分的にでも板株があるとは限らないようである[註10]。

『漢画独稽古』

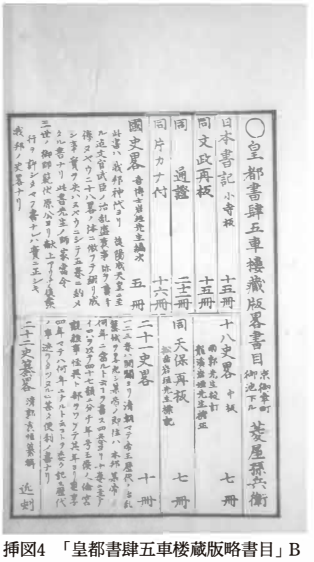
『漢画独稽古』は備中出身、大坂で活動した画家宮本君山の著作で、画論、画材、描法、画題等を図入りで説明し、乾坤二冊で文化四年（一八〇七）に刊行された。岡田米山人、岡田半江の署名を伴う二図以外は図も君山の手になるものであろう。君山の伝記を検証した高杉志緒氏の論考ですでに言及があり[註11]、プルシアンブルーについての記述があることでも最近注目されている[註12]。諸芸について＊＊独稽古と称する本が江戸時代中期以降何冊も出版されていた。

刊記は「紀藩　赭鞭館蔵版／文化四丁卯九月／双翁堂／南紀書林　和歌山新通三丁目　綛田屋平右衛門／同二丁目　帯屋伊兵衛」で帯屋伊兵衛の朱印が「青霞堂記」であるもの（金沢美術工芸大学附属図書館本等）、「青霞堂」であるもの（筆者蔵本等）（図7）が確認できる[註13]。赭鞭館、双翁堂については不明[註14]。明治版として「紀藩　赭鞭館蔵版／文化四

挿図1 『蘭斎画譜』刊記　四書肆
（千葉市美術館　ラヴィッツ・コレクション）

挿図2 「皇都書肆五車楼蔵版略書目」A

挿図3 「皇都書肆五車楼蔵版略書目」A



挿図4 「皇都書肆五車楼蔵版略書目」B

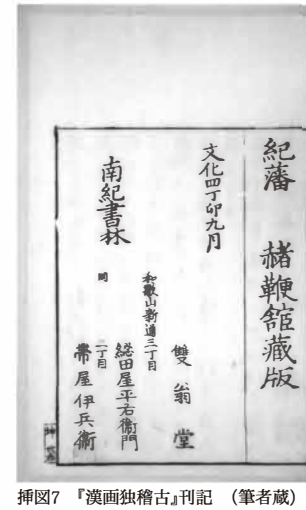
挿図5 「皇都書肆五車楼蔵版略書目」B

挿図6 「皇都書肆五車楼蔵版略書目」C

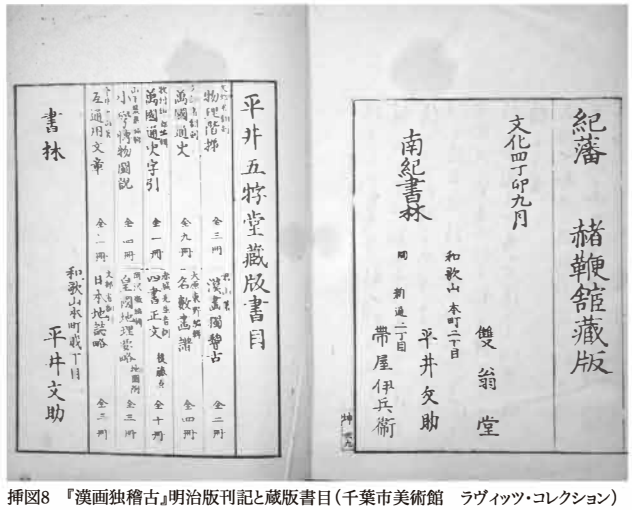
丁卯九月／双翁堂／南紀書林　和歌山本町二丁目平井文助／同新通二丁目　帯屋伊兵衛」（「和歌山」「平井文助」「新通」は入れ木）としたもの（千葉市美術館ラヴィッツ・コレクション本等）（図8）がある。千葉市美術館ラヴィッツ・コレクション本は半丁の「平井五籽堂蔵版書目」を伴う(註15)。平井文助は帯屋文助と名乗った、帯屋伊兵衛の番頭という(註16)。明治六年（一八七三）の「和歌山縣管内蔵板箇所取調書」にも「和歌山縣書林高市伊兵衛蔵版」の記載がある(註17)。終始和歌山の書肆の蔵版であった可能性が高い。帯伊書店に伝わった板木は現在和歌山市立博物館に寄託されている(註18)。

さてこのように終始和歌山の書肆の蔵版とみられ、文化四年の刊記を持つ『漢画独稽古』ではあるが、『板行御赦免書目』によると文化七年（一八一〇）、未刻として京都で板行願が出ている。『板行御赦免書目』はあくまでも板行を赦免された書の目録であり、未刻に終わったものも載ることは知られていたが(註19)、すでに刊行済と思われるものを未刻として願い出る場合もあったことになる。また和歌山は地理的に近いことから漠然と大坂本屋仲間の支配下にあったと考えられたりしたが(註20)、京都で板行を願い出ていることにも注目したい。

江戸時代の出版においては板株の権利が保護され、京・大坂・江戸三都（寛政末年以後は名古屋も含



挿図7　『漢画独稽古』刊記　（筆者蔵）



挿図8　『漢画独稽古』明治版刊記と蔵版書目（千葉市美術館　ラヴィッツ・コレクション）

めた四都）の本屋仲間の厳重な管理化にあった(註21)。和歌山など地方の本屋の出版物を全国で売るためには、本屋仲間の許可を必要とし、本屋仲間に所属する書肆の名義で手続きを行う必要があった。同じ帯屋伊兵衛が同文化四年に刊行した『紀伊国名所図会』は大坂の河内屋太助を支配人とし、刊記にも河内屋太助の名が見える。

しかし『漢画独稽古』の場合、刊記には四都の書肆の名は全く見えず、刊記からいって実際に刊行されてから板行願を提出したものであろうことが、興味深い。刊記には地方の本屋しか名が出ないのに、多くの部数が伝わり完成度の高いもの、例えば和歌山の書肆五軒が刊記にみえる『名数画譜』などもどこかで板行願を出しているのかもしれない。

『漢画独稽古』もまた『蘭斎画譜』と同様、菱屋孫兵衛の出版した本の巻末にある出版広告「皇都書肆五車楼蔵版略書目」に載っており、同じく三種の蔵版書目への掲載が確認できた。京都で板行願を出した書肆が菱屋孫兵衛の可能性もあるが、刊記等からは全く関与がうかがえない。板株は終始和歌山の本屋が持っていたものだろう。高橋明彦氏のご教示によると、蔵版とは別に「売弘」自体もそれなりの権利があったらしい。菱屋孫兵衛は「売弘」の権利に基づき『漢画独稽古』を蔵版書目に掲載していると考える。本屋仲間に入らない和歌山の本屋が板株

を持っていたことも関係するだろう。

『欽慕画譜』

皆川淇園（一七三四～一八〇七）を偲んで出版された書画集。丹波亀山藩の家老を勤めた松平貞幹（一七七六～一八二四）の文化十年（一八一三）五月の序文を伴う（図9）。文化十年は淇園の七回忌にあたる。経緯は岡本豊彦所蔵の呉春画淇園題の作品に付して豊彦が書いた文章からもわかる。淇園が亀山藩に賓師の礼を持って招かれていたことから、藩主の血筋を引く家老で、本草学者でもあった貞幹が序を記すものであろう。淇園の書画（門人村上松堂縮摸とある。村上松堂は画人としては岸駒の門人であるが、ここで「門人」と記すのは淇園とも何らかの関係があったものか）にはじまり、文化十年五月の時点ですでに没している呉春（一七五二～一八一一）、渡辺南岳（一七六七～一八一三　正月四日に没）、長沢芦雪（一七五四～一七九九）、円山応挙（一七三三～一七九五）の四人は物故者ながら淇園の「醇醪（じゅんろう、混じりけのない濃厚な濁り酒の意味から、交際が深いという意味か）」の友として掲載したとある。物故者掲載の経緯を記す伏見の采寅なる人物と文中で言及される佐野冠（済民、序文にも済民の名がある。『平安人物志』文化十年版医家の部に載る）が実質的な編者か。続いて吉村蘭洲（一七三九～一八一六）の作品に七十六翁とある。蘭洲の七十六歳は文化十年にあたり、他の画家についても同様に文化十年時点の新作を載せると推定できる。以下月峯（一七六〇～一八三九）、山跡鶴嶺（生没年不詳）、円山応震（一七九〇～一八三八）、山口素絢（一七五九～一八一八）、岡本豊彦（一七七三～一八四五）、松村景文（一七七九～一八四三）、円山応瑞（一七六六～一八二九）、河村文鳳（生没年不詳）、奥文鳴（不詳～一八一三）、吉村孝敬（一七七〇～一八三六）、土岐瑛昌（生没年不詳）、河村琦鳳（一七七八～一八五二）、東東寅（一七九三～一八五三）、長沢芦洲（一七八七～一八四七）、八田古秀（一七六〇～一八二二）、岸岱（一七八五～一八六五）、村上東洲（不詳～一八二〇、七十二翁とあるのが新作であれば生年は一七四三か）（図10）、佐久間草偃（不詳～一八二八）、佐々木大寿（生没年不詳）、東東洋（一七五五～一八三九）、村上松堂（一七七六～一八四一）、西村楠亭（一七五五～一八三四）、森嶋和敬（孟和、布袋庵、詳細不明）、木下応受（一七七七～一八一五）、岸駒（一七四九～一八三八、ただし署名は岸岱縮）、原在明（一七八一～一八四四）、上田耕夫（一七六〇～一八三二）、狩野永俊（一七六九～一八一六）が参加し、『平安人物志』文化十年版の画家の部をそのまま見るようである。

挿図9　『欽慕画譜』序
（千葉市美術館　ラヴィッツ・コレクション）

挿図10　『欽慕画譜』　村上東洲挿図
（千葉市美術館　ラヴィッツ・コレクション）

挿図11　「皇都五車楼画譜類蔵版略書目」

千葉市美術館ラヴィッツ・コレクション本の刊記は「天保十亥五月新刻／皇都書林／寺町通五條上町／葛西市郎兵衛／西堀川通佛光寺下町／梶川七郎兵衛」（半丁）、「皇都五車楼画譜類蔵版略書目／（『芥子園画伝』以下全十七タイトル）（図11）／御幸町姉小路上ル町　皇都書肆　菱屋孫兵衛　蔵板」（後表紙見返全面）。

天王寺屋（葛西）市郎兵衛の明和期の当主は学者葛応禎として『平安人物志』明和五年（一七六八）版・安永四年（一七七五）版・天明二年（一七八二）版に載る人物で、皆川淇園と同時代人であった。銭屋（梶川）七郎兵衛は『平安人物志』明和五年版・安永四年版・天明二年版の版元に名を連ねる書肆であり、偶然ではあろうが『平安人物志』的な本書にふさわしい。

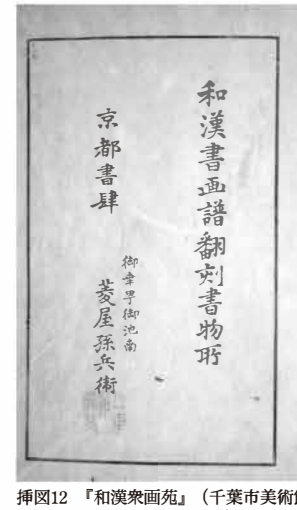
集めた作品は、文化十年時点での新作と思われるが、『板行御赦免書目』では文政二年（一八一九）に未刻とある。天保十年（一八三九）に出版されるまで、板行が許可されてから二十年もかかっている。

巻末の「皇都五車楼画譜類蔵版略書目」中の『融斎画譜』が弘化三年（一八四六）の序を持つであろうことから、千葉市美術館ラヴィッツ・コレクション本『欽慕画譜』は早くても弘化三年以降成立の後印本とみる。文政元年の刊記を伴う『漢画指南』ではじまる五丁半の「皇都書肆五車楼蔵版略書目」Aには含まれず、嘉永三年（一八五〇）以降と思われる、『日本書記　小寺板』ではじまる十丁の広告Bに『欽慕画譜』が含まれることとも年代的に合致する。『和漢独稽古』のように板株が本屋仲間外にあるという事情はないので、蔵版書目に掲載すること、すなわち板株の所持と考えると、弘化三年までに板株の権利を得たものであろう。

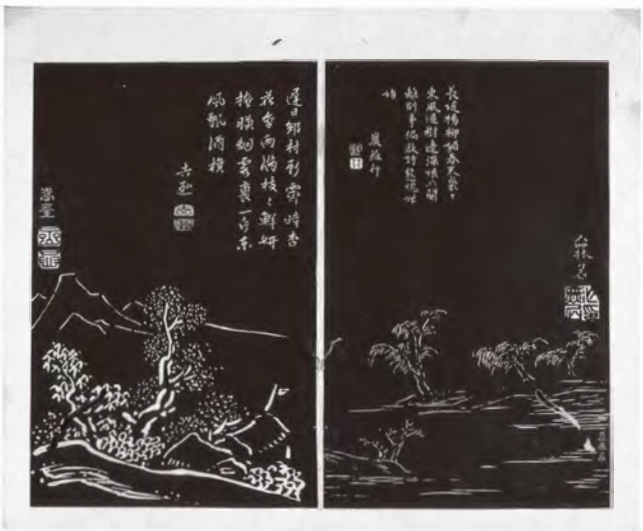
おわりに

『蘭斎画譜』は大坂で秋田屋市兵衛が開版し、板株を所有していたが、菱屋孫兵衛は途中から刊記に名を連ね、蔵版書目にも載せる。『漢画独稽古』は紀州和歌山の本屋の開板で板株は和歌山の本屋が持った。菱屋孫兵衛は恐らく「売弘」の権利を持ち、蔵版目録にも載せた。『欽慕画譜』は計画から、実際の刊行までに長い時間を要した。菱屋孫兵衛は出版後の早い時点で参入し、板株を入手し蔵版書目にも載せる。

今回、後摺本の成立時期を絞り込むために蔵版書目を使用した。ここではたまたま館蔵本の巻末に附属する蔵版書目を使用しただけだが、蔵版書目の改変に注目して成立年代を絞り込む手法での成果も報告されている(註23)。蔵版書目に出てくる本について調査をすすめ、更に蔵版書目を活用して状況を明らかにしたい。菱屋孫兵衛は江戸時代中期から明治にかけて京都で画譜、絵本を多く出版した。求版による出版が多く、必然的に後摺ということになるが、後摺にもまたそれ相応の意義があり、適切に位置づけていきたい。求版による、画譜、絵本の出版については、よく似た傾向の画譜、絵本の板株をまとめて所持していれば類版のトラブルを避けられるので求版することもあったろうし、出版の権利は利殖のための売り買いでもある。しかし、類版のトラブル回避、利殖という以上に、菱屋孫兵衛は画譜、絵本の権利をまとめて所持し、売ることを戦略的に行っていたように見える(註24)。『和漢衆画苑』の巻末に「和漢書画譜翻刻書物所／京都書肆　御幸町御池南／菱屋孫兵衛」（図12）とあるのも画譜、絵本の販売への積極的な取り組みをうかがわせる。また『欽慕画譜』の巻末に載る、『芥子園画伝』や『十竹斎画譜』の翻刻も含めて画譜のみを集めた「皇都　五車楼画譜類蔵版略書目」も、『欽慕画譜』の読者の



挿図12　『和漢衆画苑』（千葉市美術館ラヴィッツ・コレクション）　巻末



挿図13 『賞春芳帖』A　池大雅ほか挿図 （千葉市美術館　ラヴィッツ・コレクション）

挿図14 『賞春芳帖』A　刊記 （千葉市美術館　ラヴィッツ・コレクション）

挿図15 『賞春芳帖』B　刊記 （千葉市美術館　ラヴィッツ・コレクション）

傾向を踏まえて、画譜を宣伝する営業活動である。

販売する画譜、絵本を増やす手段として、出版に関与した私家版的な本を売品にすることもあったろう。例えば「皇都　五車楼画譜類蔵版略書目」などに載る恵美長敏編『賞春芳帖』(図13〜図15)は、著名な画人や文人以外に詩文や絵を寄せる岩垣龍渓主催の詩社松蘿館関係者が金銭的にも関与して菱屋孫兵衛から出版したものを後に売品にしたと考えられる(註25)。

菱屋孫兵衛は画譜、絵本を積極的に出版し売ろうとした。その蔵版書目にあらわれる画譜、絵本に注目した結果、三点の本についてその板株の異動や出版経緯の一端を示すことができた。菱屋孫兵衛の蔵版書目と画譜、絵本の出版活動について今後更に研究を進めていきたい。

なお、書誌の重要性を十分認識し、力及ぶ範囲で真摯に取り組むよう心がけているが、手探りの状態であり、間違いや誤解も多々あるように思う。ご教示をお願いするしだいである。

1　拙稿「森蘭斎について—支持者とのかかわりを中心に—」(『美術史』一五六、二〇〇四年三月)。

2　大阪府立中之島図書館本(六書肆版)について、及び七書肆版との前後関係については以下を参照。『大阪府立図書館蔵稀書解題目録　和漢書の部』一九六三年、一〇八〜一〇九頁。

3　なお六書肆版はこの一本しか確認できていない。『蘭斎画譜』は『日本古典籍総合目録』データベースにより以下の所蔵が知られる。国会図書館・国会図書館伊藤文庫(蘭部三　一冊)・関西大学(三冊　関西大学図書館の書誌によると、巻二〜四の三冊で刊年等が不明ということは蘭部か)・京都大学・東京藝術大学・東北大学狩野文庫(蘭部四　一冊)・龍谷大学(四冊)・大阪府立中之島図書館・長崎歴史文化博物館(蘭部一—三　三冊)・新潟県立図書館・神宮文庫・山口大学棲息堂文庫(竹部四・蘭部一　二冊)・茨城大学菅文庫(竹部二・蘭部三　二冊)・新潟大学佐野文庫(蘭部　四冊)・金沢市立図書館村松文庫(竹部一　一冊)・豊田市立図書館・京都大学大惣本・カリフォルニア大学ロサンゼルス校。

またコーニッキー版欧州所在日本古書総合目録によりスウェーデン東洋図書館(竹部三　一冊)の所蔵が知られる。

他に千葉市美術館(ラヴィッツ・コレクション)・神戸市立博物館・滝沢定春氏・国会図書館所蔵相見香雨旧蔵本(相見本)・永青文庫(熊本大学寄託)・佐賀県立図書館(蘭部四冊)・ニューヨークパブリックライブラリー・国文学研究資料館に所蔵される。

調査した範囲では大阪府立中之島図書館本が①六書肆版、国会図書館本・新潟県立図書館本・滝沢定春氏蔵本が②七書肆版A、欠落が多いが豊田市立図書館本も恐らく②七書肆版A、東京藝術大学本・神戸市立博物館本・山口大学附属図書館棲息堂文庫が③ア四書肆版、千葉市美術館本が③イ四書肆版に相当する。また刊記の記載のある目録、報告により京都大学大惣本、国文学研究資料館本、ニューヨークパブリックライブラリー本が②七書肆版、カリフォルニア大学ロサンゼルス校本が③イ四書肆版とわかる。

相見本は七書肆の刊記だが、紙質、摺りの状態からいって遅い時期のものとみられ、七書肆版Bということになる。蘭部巻三、十三丁裏の矢倉安安の印がないのが顕著な相違である(相見本に矢倉安安の印がないことについては安永拓世氏のご教示による)。国会図書館伊藤文庫本は蘭部巻三のみ、新潟大学図書館佐野文庫本は蘭部四冊のみだが、紙や摺の比較により七書肆版と推定する。

4　細合半斎と藤屋弥兵衛については、以下を参照。山口恭子「細合半斎と書肆・藤屋弥兵衛——滝本流中興の背景——」(『日本文学誌要』六三、二〇〇一年)。

5　刊行の経緯については注1拙稿、及び拙稿「大坂の『唐画』と南蘋風　森蘭斎を中心に」(『美術フォーラム21』第一七号、二〇〇八年五月刊行予定)でも述べた。出願から刊行までに三年かかっているのは、沈南蘋の画法を紹介する点で、既に刊行されていた建部凌岱の画譜『寒葉斎画譜』や宋紫石の画譜『宋紫石画譜』『古今画藪後八種』、安永九年(一七八〇)刊行の『古今画藪後八種四体譜』との調整が生じたためかもしれない。なお、当時の江戸の代表的な本屋、須原屋茂兵衛は『蘭斎画譜』にも、すべての宋紫石の画譜にも名前を連ねている。

6　広告に含まれる『応挙画譜』の刊年が嘉永三年であるため。嘉永六年以降である可能性は、『融斎画譜』が嘉永六年の序を持つものであるかもしれないため。『融斎画譜』についてはラヴィッツ・コレクションを確認するだけでも、天保二年(一八三一)序、天保十二年(一八四一)求版、弘化三年六月発行の刊記、嘉永六年(一八五三)の新序を持つ菱屋孫兵衛版二帖と、弘化三年十月の序を持ち、刊記がない二帖の二種類があり、今後の検討を要する。蔵版書目Bには「花鳥彩色　一帖」、蔵版書目Cには「花鳥の部　一冊」とある。題材が花鳥、菱屋孫兵衛版という条件には前者のほうが近いが、後者も決定的に異なるとはいえない。

7　千葉市美術館ラヴィッツ・コレクション本『和漢衆画苑』の巻末の蔵版書目は最初の一丁が欠落しているが、二丁目以降を比較することにより、書誌研究会編『近世後期書林蔵版書目集』(ゆまに書房、一九八四年)掲載の菱屋孫兵衛蔵版書目と一致すると判断した。

8　註7、前掲書。なお『蘭斎画譜』の後に載る『五之画数』『八之画数』は数が「藪」の誤りで、冊数からいってそれぞれ宋紫石『古今画藪後八種四体譜』(五巻五冊)、宋紫石

『古今画藪後八種』(八巻八冊)に対応すると考えたい。『後八種』『後八種四体譜』の刊記には当初から須原屋茂兵衛の名が見える。

9 書誌学としては基本事項なのかもしれないが、筆者は以下の記述を読むまでは認識していなかった。

10 橋口侯之介『続和本入門　江戸の本屋と本作り』(平凡社、二〇〇七年)一六六頁～一六七頁。

鈴木淳氏のご教示によれば、『蘭斎画譜』の錯綜した出版事情は書肆が三都にまたがるためだろうとのこと。七書肆版は『蘭斎画譜　後編』と表紙の色、題箋の書体がよく似る。相見本『蘭斎画譜　後編』は巻末に須原屋茂兵衛の薬の広告を伴い、薬の売弘所として秋田屋市兵衛の名が見える。『蘭斎画譜』七書肆版Bは③イ四書肆版以降に『蘭斎画譜　後編』と合わせて須原屋茂兵衛が売り出した可能性を考えたい。

11 高杉志緒「宮本君山研究序論」(『下関短期大学紀要』二五、二〇〇七年)。

12 展覧会図録『西洋の青　プルシアンブルーをめぐって』(神戸市立博物館、二〇〇七年)。

13 なお、高杉志緒氏・岩佐伸一氏のご教示によれば、見返しを持つものもあり、体裁にばらつきがあるとのこと。今後調査を進めたい。

14 「紀藩　赭鞭館蔵版」は、文化七年刊大原東野編『名数画譜』の「紀藩　南嶺館蔵版」とよく似た蔵版表記である。須山高明「近世紀州書肆出版物編年目録稿」(上)(『和歌山県立博物館紀要』五、二〇〇〇年)によれば文化十一年刊森川竹窓『畫語録』に「紀藩　四以窩蔵版」の表記がある。この三件は和歌山書肆のみが刊記にあり、一見藩校や藩関係の蔵版と見まがうような表記には、本屋仲間からの追求に備える意図があるのかもしれない。しかし、文化十五年刊武部子芸『発泡打膿考』の「紀藩　普済堂蔵版」など、刊記に本屋仲間の書肆が入る場合にも見られる表記ではある。双翁堂については不明。綛田屋平右衛門、帯屋伊兵衛両者を指すものかと推測。

15 「平井五牸堂蔵版書目」には明治時代の教科書に混じって、『名数画譜』がみえるのも興味深い。『名数画譜』は紀藩　南嶺館蔵版として文化七年刊。坂本屋喜一郎／坂本屋大治郎／銭屋喜十郎／綛田屋平右衛門／帯屋伊兵衛の五書肆が刊記にみえる。他に阪本屋喜一郎／阪本屋大二郎の二書肆版があり、平井文助が刊行した明治版もある。千葉市美術館ラヴィッツ・コレクション本明治版『名数画譜』も「平井五牸堂蔵版書目」を伴う。明治六年(一八七三)の「和歌山縣管内蔵板箇所取調書」には和歌山縣書林野田大二郎・和歌山縣書林野田喜一郎・和歌山縣書林高市伊兵衛蔵版とあり、和歌山の書肆の間で板株の権利の移動があったことがうかがわれる。

内容面で『漢画独稽古』と直接は関連しない、今井元雄編『漢画独稽古　後編』を明治十三年(一八八〇)に平井文助が出版しており、明治版『漢画独稽古』と合わせて販売したものか。

16 大和博幸「和歌山の出版と書肆」(朝倉治彦・大和博幸編『近世地方出版の研究』東京堂出版、一九九三年)、二一八頁。

17 大和博幸「研究ノート　江戸時代若山の出版と書誌の基礎的考察補遺―『和歌山縣館内蔵板箇所取調書』考」(『出版研究』二二、一九九一年)。

18 高市績『青霞堂板木目録』(帯伊書店、一九九三年)。なお同書あとがきによれば、「幕末から明治の初期にかけて再版した板木は明治十八年に、本町七丁目和泉屋酒蔵にて消失し、現存の板木はその時の焼け残った板木を保存しているのです。」とある。

19 宗政五十緒・若林正治編『近世京都出版資料』(日本古書通信社、一九六五年)、一九二頁。

20 蒔田稲城『京阪書籍商史』(『日本出版大観』上巻、タイムス社、一九二九年。改題複製本、臨川書店、一九八二年による)、三三七頁。

21 註9前掲書、一五四頁、一五二～一五九頁。

22 註9前掲書、七四頁、一六八頁。

23 松田泰代「近世商業出版における蔵版目録のあり方について　書肆須原屋市兵衛の事例より」(日本出版学会二〇〇七年度春季研究発表会における研究発表、二〇〇七年五月十九日)。なお内容を知りえたのは松田氏のご好意によるものである。記して謝意を表します。

24 『日本古典籍書誌学辞典』の長島弘明「菱屋孫兵衛」項目解説にも「求版本を含めた画本・画譜の類の出版が多く」との記述がある。

25 『賞春芳帖』については別稿を準備している。菱屋孫兵衛について、初代は岩垣松苗(龍渓の養子の名だが、年代的には符号しない)家の学僕をしていたが、のち同家の著書を譲りうけ出版したのが始まり、といわれており、岩垣家とのつながりもあって『賞春芳帖』にかかわったのだろう。菱屋孫兵衛の出自については以下を参照。京都書肆変遷編纂委員会編『京都書肆変遷史』(京都府書店商業組合、一九九四年)。

Three case studies of *Ehon* (Japanese picture book) publishing in the Edo period: A study of the activities of the Kyoto publisher and bookseller Hishiya Magobei

Itô Shiori

Hishiya Magobei published many picture books from the mid-Edo period through to the Meiji period, in Kyoto. In many cases, Hishiya Magobei acquired the original woodblocks following the first printing and printed many later editions as a new publisher and printed many later editions. It is true that the first edition of earlier impressions is the most important in the study of the *ehon* picture book. Not withstanding the beauty of a first edition, later editions are equally as important. Later editions were bought and sold, seen and read, and used in the same way. They have their own significance to which we pay attention in our study. In this article, I present three examples, *Ransai Gafu* , *Kanga Hitori Geiko* and *Kimbo Gafu* in order to study the publications by Hishiya Magobei.

Ransai Gafu (Ransai Painting Album), is a picture book of paintings by Mori Ransai. Mori Ransai (1746–1801) was a Japanese painter who studied the Chinese painter, Shen Nanpin. Akitaya Ichibei originally published this book and owned the copyright to the work and all related woodblocks. In later editions, Hishiya Magobei's name also appears in publication notes at the end of the book. Hishiya Magobei listed this title amongst his own publications in his advertisements. However Suharaya Mohei also included this title in his publication advertisements. Copyright was subsequently divided after 1812, with at least two publishers sharing publication rights.

Kanga Hitori Geiko (Self Study Guide on Chinese Style Painting) was written by the painter Miyamoto Kunzan. He explained the theories, materials, manners and subjects for painting in text and illustrations. This book was published in 1807 by publishers in Wakayama. But in 1810 there was a formal request for permission to publish the work in Kyoto. According to the document *Hankou Goshamen Shomoku*, the blocks had not yet been carved for this book. In the Edo period, it was necessary to have permission from bookseller guilds in order to sell local books in other areas. "Local" meant outside of Kyoto, Osaka and Edo (and Nagoya in the 19th century). Only publishers belonging to the guild could make such formal requests. Likely after the initial publication, some Kyoto publisher made such a request. Hishiya Magobei included this title in his advertisement for his publications. However, the publishers of Wakayama always retained the original woodblocks with copyright. I think Hishiya Magobei only had sales rights for this work. Such "sales-only rights" were also permitted. This "sales-rights only" title can be found in advertisements for publications by Hishiya Magobei.

Kinbo Gafu was made in memory of the great scholar Minagawa Kien (1734–1807). This book' s preface is dated 1813, and the pictures and texts were newly made for this book at that time. But according to the *Hankou Goshamen Shomoku* document, this book was not yet engraved by 1819. It was finally published in 1839. Twenty years passed between the time permission was granted until the book was finally published. In this case, Hishiya Magobei included this title in his advertisement for publications as owner of the copyright. From my study of advertisements, he acquired the copyright before 1846.

Hishiya Magobei tried to publish and sell a lot of picture books. From my study of some of the titles in his advertisement for publications, I have chosen the above three cases regarding formal requests to publish and copyright transfers. I hope to continue this study of Hishiya Magobei's publication of picture books through a further examination of historical advertisements for publications.

千葉市美術館研究紀要
採蓮　第十一号
二〇〇八年三月三十一日発行
編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団
千葉市美術館
〒二六〇―八七三　千葉市中央区中央三―十―八
電話　〇四三―二二一―二三一一（代）
制作――――印象社

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.11
March 31, 2008

Edited and Published by
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 JAPAN
Phone. 043-221-2311

Produced by
Insho-sha

ISSN 1343-148X